

Episode1

あの子が涙ながらに打ち明けてくれたのは、二年前のことでした――。

当時、私は三十八歳で息子は高校卒業したばかりの十八歳でした。卒業式を終えた、その日の夜のこと。

夕食を食べた後に、「お母さん、話があるんだけど」と言われたとき、私はなんとなく直感めいたものがあつたのです。

テーブルを挟んで、私と息子の智哉^{ともや}は向き合つたのです。私は少し緊張しながら、智哉の言葉を待っていました。

「どうしたの？ あらたまつて」

私は言いにくそうにもじもじしているあの子に言いました。こんな風に面と向かつて話をすることなんて滅多にありません。

私の家庭では夫が十年前に交通事故で他界してから、恐らく一度もそんな光景はなかったと思います。母一人子一人で、狭いアパートに住み、今まで暮らしてきました。夫が亡くなり、女手で一人息子を育てていかなければならないプレッシャーは半端なものではありませんでした。

幸いにも私の希望する職種で中途採用の口が見つかったので、なんとか今までやってこれたのです。

それに主人が残してくれた保険金もありました。三千万ほどありますが、そのお金には手を付けずに、智哉のためにとっておいたのです。

私たちの生活は私の収入だけで、やりくりするように心がけてきました。智哉も良い子で、それがわかっており、わがままは一切言わずに、私を助けてくれました。文字通り私と智哉は二人三脚でここまでやってきたのです。

これで彼が卒業することにより、働いてくれたら、収入も安定して、住むところもグレードアップするかな、と期待していました。智哉は大学には行かずに、就職したいと言っていたので、私もそのつもりでした。

「あのさ、俺……実は」

私はあえて何も言わずに黙っていました。

「昔から、自分に違和感が、あつたっていうか……男でいることが辛かつたっていうか……男子を好きになったこともあつたんだよね」

智哉はなんとかして、自分の頭の中をフル回転させて、言葉を選んでいるのがわかりました。

「うん……それで？」

「今までは学校に通ってたから、男のままで通してたけど……本当は女の子になりたいんだ。小学校のころから、好きになるのは男子ばかりで……本当に辛くて……」

智哉は涙を見せました。

「うん、解ってたよ」

この子がそういう子だということは薄々感じてました。中学二年生ごろから、なんとなく様子がおかしかったのです。それが顕著に現れたのは、私の誕生日に手袋をプレゼントしてくれたことがあったのです。それがとても女の子っぽくて、センスがいいんです。

最初は誰かクラスの女の子にでも頼んで一緒に選んでもらったのかと思っていました。でも、そうでもないみたいでした。そんな彼女はいいみたいでしたし、遊んでいるのはいつも男の子ばかりでした。

その後も、ピンクや赤系のものを好んで買うようになり、この子は普通の男子とはちょっと違うと思い始めたのです。

高校に進んでからはそれがさらに加速してきました。学校ではどうだかわかりませんが、家では「これ可愛い」とか、テレビでアイドルを見て「この子めっちゃカッコイイ、やばーい」なんて言っているのです。

それはきっと、さりげなく私にアピールしているのだと思いました。いつかは母親に打ち明けなければならないと、解っていたのだと思います。

「中学の頃から、そうじゃないかなって思った。よく話してくれたわね。今まで辛かったね」

そう言って私は智哉に寄り添い、抱きしめてあげたのです。智哉は私の胸の中で泣き崩れました。

「女の子に生んであげられなくてごめんね……」

私もなぜだか涙が溢れてきたのです。

それから夜遅い時間まで、彼と今後のことを話し合いました。その時点ではまだ、性転換手術のことまでは、考えていないようでした。

とりあえずは女の子の服を着ていくところからやっといこうということで、女装をすることになったのです。

私と一緒に、ネットでどんな服を買うのか選ぶことにしました。通販サイトでレディースファッションを見ていったのですが、そのときの智哉の嬉しそうな顔は今でも忘れられません。とても目を輝かせて見ていたのです。

彼もやっと私に心を開いてくれたと同時に、本当に女の子になりたいのだと思いました。いつでも女装できるように、一通り服や下着、靴、ウィッグまで選んで買ってあげたのです。その後は彼がバイトして働きながら購入していくと言っておりました。

一週間ほどして注文した商品が届きました。いくつか注文したので、結構な段ボールに入っていたのです。智哉は水を得た魚のうに、その箱を開けて中身を取り出しては、喜ん

でいました。

さっそく身に着けてみます。ブラウスとスカートを着たら、少し大きめでしたがピッタリでした。彼もすごくテンションをあげて、喜んでいたのです。

私の前で一回りして見せてくれるほどでした。初めてスカートを穿いたことで、やっと本当の自分になれたと思ったようで笑顔も違っていました。この子のこんな生き生きとした笑顔を見たのは初めてでした。私は買ってやってよかったと心底思ったのです。

本当はもっといろいろと買ってやりたかったのですが、我が家の経済状況も決して余裕があるほうではありませんでした。

智哉はより女の子に近づきたくて、脚のムダ毛を剃りツルツルにしていました。元々すね毛はそれほど濃い方ではないようで、それでも全部剃るのに三十分ほどかかったようです。その脚でスカートを穿いたら、私が見ても女の子に見えたのです。

最初は男子が女装をするということで、果たして可愛くなるかどうかと心配しましたが、意外といけるのではないかと思い始めたのです。

そんな彼に、私は仕事の休みの日を利用して、顔にメイクをしてあげることにしました。私もそれほどメイクには詳しい法ではありませんが、オーソドックスなやり方で施してあげたのです。少し濃い目になってしまいましたが、仕上がりを見たら、本当に可愛くなったのです。鏡を見せてあげたら喜んでいました。

「うわー、かわいい！ 見てみて」

まるで女の子なのです。そこには息子の智哉はいませんでした。彼にはやはり女の子が一番だと思い、普段から女の子で生活するように、普段着の服やルームウェアも買ってあげたのです。

「今日から^{みく}未来って呼んで」

智哉は嬉しそうに言いました。私は彼の言う通り家にいるときは「みくちゃん」と呼ぶことにしたのです。